

研究課題	創造力を育む協働型ものづくりプロジェクトの創出と展開
副題	～オンラインでつながり、3D プリンタでアイデアを形にする学校間交流を通して～
キーワード	学校間交流、地域理解、デジタル表現、社会発信、ものづくり
学校/団体名	公立柏メディア教育研究会
所在地	〒277-0921 千葉県柏市大津ケ丘 3-50
ホームページ	https://kashiwa.ed.jp/otsul-e/

1. 研究の背景

予測が困難で急速に変化する社会においては、知識を受け取るだけでなく、自ら課題を見いだし、多様な他者と協働しながら新たな価値を創造していく力の育成が求められている。学習指導要領においても「持続可能な社会の創り手の育成」が掲げられ、学校には社会とつながりながら学ぶ教育の実現が期待されている。こうした時代の要請を踏まえると、学校は教室の中に閉じない学びを構想し、他者との関わりの中で学びを深める機会を意図的に設けていく必要がある。

その具体的な手立ての一つとして、学校間交流が挙げられる。異なる地域に暮らす子供たちが互いの生活や文化に触れ、考えを交流させることは、自らの価値観を見直し、新たな視点を得る契機となる。また、多様な背景をもつ他者と関わる経験は、他者理解や協働する姿勢を育むうえでも重要である。

一方で、教育現場において学校間交流の意義は広く認識されているものの、交流先の確保や継続的な関係づくり、日程調整や運営に伴う負担などの課題があり、取組が単発的な活動にとどまる場合も少なくない。交流活動を教育課程の中にどのように位置付け、日常の学びと結び付けていくかについても明確な枠組みが十分に整っていないのが現状である。

こうした状況を踏まえると、学校間交流を個々の学校の努力に依存するのではなく、共通のテーマと枠組みをもつプロジェクトとして構築し、参加しやすく継続可能な形で展開していくことが求められる。

2. 研究の目的

本研究は、給食を共通テーマとした学校間交流をプロジェクトとして構築し、学校同士が日常的に関わりながら学びを深める学習モデルを確立するとともに、児童が地域や社会とのつながりを実感しながら主体的に学ぶ姿の育成を目指す。

(1) プロジェクトとして目指すもの

本研究では、地域に根ざした学習を基盤としながら、学校間交流を単発的な行事ではなく、継続的に学びが深まるプロジェクト型の学習として展開することを目指す。児童は互いの給食を紹介し合い、コメントによる交流を通して地域の特色を再認識し、その気づきを表現し発信していく。

また、1人1台端末環境を活用し、時間や距離の制約を超えて学校同士が日常的に交流できる環境を整え、給食紹介 → 交流 → 再認識 → 表現 → 発信という学びの循環を構築する。

さらに、学びの成果をデジタル作品や手描きの作品として具体化し、地域へ発信する取組を通して、学校・地域・他地域の学校をつなぐ学習プロジェクトとして発展させることを目指す。

(2) 児童の変容として目指すもの

本研究では、給食を通じた地域理解や学校間交流の経験を通して、児童が自らの学びと社会とのつながりを実感しながら主体的に学ぶ姿の育成を目指す。具体的には、互いの給食を紹介し合う活動や交流を通して地域のよさや特色に気づくとともに、他地域の児童との対話を通して多様な考えに触れ、自分の考えを見直したり深めたりする姿を育てる。

また、気づいたことを表現し発信する経験を通して、自分の考えを分かりやすく伝える工夫を行い、表現することへの自信を高めることを目指す。さらに、作品を地域に届けたり交流の成果を共有したりする活動を通して、自分たちの学びが社会とつながっていることを実感し、「自分の行動が誰かの役に立つ」という感覚を育むことで、社会に働きかけようとする意識を育てることをねらいとする。

観点	具体的な指標（児童の姿）	主なデータ
発信する力	給食のよさや学びの成果について、自分の考えを整理し、写真や文章、スライド、交流掲示板への投稿などを通して分かりやすく伝えようとする姿	児童アンケート、交流掲示板投稿、スライド資料、制作作品
伝え合う力	他地域の児童とのコメント交流を通して多様な考えに触れ、相手の意見を理解しながら自分の考えを見直したり深めたりする姿	掲示板コメント、児童アンケート
考えて工夫する力	交流を通して得た気づきをもとに、自分なりに考え、表現方法や活動の進め方を工夫しようとする姿	制作過程の記録、作品、実践記録
地域についての理解	給食を通して地域の食材や食文化に関心を持ち、自分たちの地域のよさや特徴に気づく姿	掲示板投稿、児童アンケート、振り返り
地域や社会とのつながりの自覚	学びの成果が地域や社会と関わっていることを実感し、自分の行動が誰かの役に立つと感じる姿	児童アンケート、振り返り記述

表1 児童の変容を捉える観点と指標

3. 研究の経過

全国から7校が参加してプロジェクトを開始し、年度途中から台湾の学校1校も加わった。単発的な交流に終わらせるのではなく、日常の教育活動の中に位置付けながら継続的な交流が生まれる仕組みづくりを重視して本研究を進めてきた。

(1) プロジェクトの構想と連携体制

はじめに、交流の目的や学習の流れを整

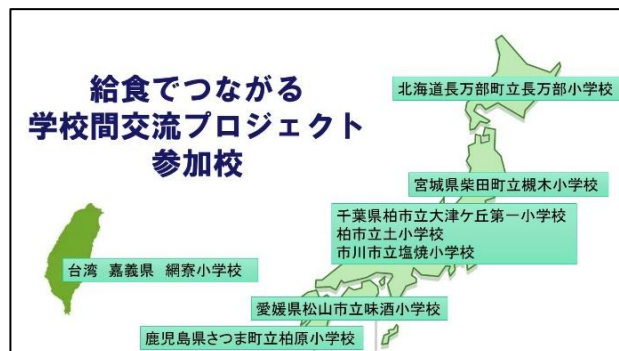


図1 プロジェクト参加校

理し、給食を通して地域の特色を学び合うプロジェクトとして全体構想を策定した。参加校とオンライン会議を実施し、年間の大まかな見通しや役割分担を共有するとともに、無理のないスケジュールで進められるよう調整を行った。特に、次の活動段階へ移行する際にはオンライン会議を設け、進捗の確認や課題の共有を行うことで、参加校が共通の方向性をもって取り組めるようにした。また、予算の範囲内で参加校への学校訪問も行った。



図2 参加校とのオンライン会議による打ち合わせ

(2) 枠組みの整理

1人1台端末環境を活用し、日常的にやりとりができる環境を整備した。具体的には、学校間で給食を紹介し合うための交流用電子掲示板を開設し、給食の写真や献立、説明などを投稿できるようにした。児童は掲示板を通して互いの給食を閲覧し、気づいたことや質問、感想などをコメントとして投稿することで交流を行った。また、日々の連絡や情報共有は教員間でチャットを活用して行い、授業の様子や児童の反応を随時共有することで、実践を柔軟に調整できるようにした。これにより、地理的に離れた学校同士であっても継続的な交流を実現することができた。

(3) 校内体制の整備と実践の推進

校内においては、学年や教科を横断して取り組めるよう指導体制を整え、学習のねらいや評価の視点を教職員間で共有するとともに、栄養教諭も加わることで給食や地域の食文化への理解を深めながら、総合的な学習の時間を中心に ICT 活用や表現活動など各教科の学びとも関連付けて実践を進めた。また、交流の進捗状況を適宜振り返りながら実践の改善を図り、児童の活動状況や交流の様子を教職員間で共有することで、学校全体としてプロジェクトを支える体制づくりを進めた。

(4) 成果の共有と改善サイクル

実践の過程では、児童の記録やアンケート、授業の振り返りをもとに成果と課題を整理し、参加校間で共有した。オンライン会議やチャットでのやりとりを確認しながら改善点を検討し、次の活動へと反映させることで、プロジェクトとしての質の向上を図った。このように、実践の振り返りと改善を繰り返すことで、交流を単なる経験にとどめるのではなく、継続的に学びが深まるプロセスとして発展させることができた。

4. 代表的な実践

ここでは、プロジェクトの流れについて述べる。

(1) 給食の紹介

はじめに、自校の給食について、給食の写真と献立、感想の情報をオンラインの交流掲示板に投稿した。この掲示板は毎日の給食を紹介する形で継続的に更新され、参加校の児童による投稿

(3) 地域の特色の再認識

各校の給食の特色を整理するために、「給食投票大会」を実施した。児童は、他校の給食の中から「食べてみたい給食」を選び、その理由を書くとともに、自校の給食の中から「自慢の給食」を選び、その魅力を表現した。回答数は350件を超え、活発な交流が見られた。

他校の給食については、「食べたことがないので気になる」「自分の学校にはない献立で珍しい」「地域の食材が使われていておいしそう」といった声が多く見られた。一方、自校の給食については、「出荷量日本一の柏市のカブを使っている」「学校の人気メニューでみんなが楽しみにしている」など、地域性や学校らしさを意識した記述が多く見られた。他校の給食と比較しながら自校の給食を見つめ直すことで、児童は自分たちの学校や地域の特色を再認識していった。

(4) デジタルとアナログを融合させた表現活動

その気づきをもとに、地域の魅力を表す作品づくりへと学びを発展させていった。本実践では、デジタルとアナログを融合させた表現活動として、二つの形で給食の魅力を表現する活動を行った。

一つ目は、自校の給食のよさを紹介するスライド資料の作成である。児童は、給食の特徴や地域の食材、人気の理由などを整理し、写真や説明文を工夫しながら、他校の児童にも分かりやすく伝えることを意識してスライドを制作した。

二つ目は、その給食を象徴するイラストの制作である。児童は、自校の給食の魅力や地域らしさが伝わるように、手描きの絵で表現した。こうして制作されたイラストはデジタルデータ化され、3Dプリンタを用いてアクリルキーホルダーとして形にした。キーホルダーの裏面には、スライド資料につながるQRコードを付けた。キーホルダーを手にした人がQRコードを読み取ることで、作品のもとになった給食紹介のスライドを見ることができる仕組みとした。

また、キーホルダーはカプセルトイ（ガチャ）に入れられるサイズで制作した。ガチャを回してカプセルを取り出すというゲーム性を取り入れることで、作品に触れる体験そのものが学びへの関心を高める仕掛けとなった。

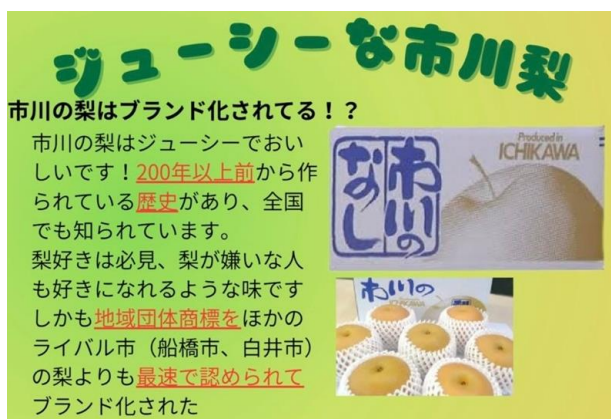


図6 給食を紹介するスライド



図7 制作したアクリルキーホルダー

(5) 地域・社会への発信

制作したアクリルキーホルダーは、児童自身が体験するだけでなく、地域の方や来校者、教職員にも回してもらい形で活用した。地域の方がガチャを回し、カプセルから作品を取り出す

ことで、児童が制作した給食のイラストや地域の魅力に触れる機会となった。体験した方からは、「キャラクターがかわいい」「給食の説明が分かりやすい」といった感想や、「地域によって給食が違うことが分かる」といった声も聞かれ、児童が調べてまとめた内容に関心を示す様子が見られた。

児童にとっても、自分たちが制作した作品を地域の方が手に取る様子を見ることは大きな喜びとなった。このように、児童の作品を地域の人に体験してもらうことで、学校の学びを学校内にとどめるのではなく、地域社会へと広げる取組となった。



図8 地域の方にガチャを体験してもらう

5. 研究の成果

表1で示した児童の変容を捉える観点に基づき、児童アンケート（回答者153名）、交流掲示板の投稿記録、給食投票大会の結果等をもとに成果を整理した。

(1) 発信する力

児童アンケート「自分たちの給食のよさを他の学校の友だちに伝えることができましたか」に対し、約93%の児童が肯定的に回答した。また、交流掲示板では給食の写真や献立の投稿が継続的に行われ、投稿数は400件以上となった。児童は写真や説明文を工夫しながら給食の特徴を紹介しており、給食紹介スライドの制作などを通して、自分たちの給食のよさを分かりやすく伝えようとする姿が見られた。

これらの結果から、給食紹介やデジタル表現を取り入れた活動は、児童が自分たちの地域の魅力を発信する力を育む学習として有効であることが確認された。

(2) 伝え合う力

児童アンケート「やりとりを通して、学びを広げることができましたか」に対し、約86%の児童が肯定的に回答した。交流掲示板では、投稿された給食に対して質問や感想などのコメントが多く寄せられ、給食をきっかけとした対話が生まれていた。

このことから、オンライン掲示板を活用した交流は、児童が他者の考えに触れながら学びを広げる機会となっていたことが示された。

(3) 考えて工夫する力

児童アンケート「作品づくりで、自分なりのアイデアを考えることができましたか」に対し、約79%の児童が肯定的に回答した。実際の学習では、児童は給食の魅力を紹介するスライドを

みんなの給食PR

給食名	かにめし
自治体名	北海道長万部町
学校名	長万部小学校

画像

画像2

♡ 3
管理者01

図9 QRコードから開くWebページ

制作するとともに、その給食を象徴するイラストを制作した。制作したイラストはアクリルキーホルダーとして形にされ、裏面には給食紹介スライドにつながる QR コードを付けることで、作品とデジタル資料を結び付けた表現活動を行った。

これらの活動から、児童が自校の給食の魅力をどのように表現するかを考えながら、表現方法や発信方法を工夫していたことが確認された。

(4) 地域についての理解

児童アンケートでは、「給食にはその地域らしさがあると思うか」という質問に対し、約 96% の児童が肯定的に回答した。また、「地域のことをもっと知りたいと思うか」という質問では、約 86% の児童が肯定的に回答した。さらに、給食の特色を整理するために実施した給食投票大会では回答数が 350 件以上となり、他地域の給食への関心が高いことが確認された。

(5) 地域や社会とのつながりの自覚

児童アンケート「自分たちにも地域をよくする力があると思うか」に対し、約 66% の児童が肯定的に回答した。制作したアクリルキーホルダーは、児童だけでなく地域の方や来校者にも体験してもらう形で活用し、地域の方がガチャを回して作品を手にとることで、児童が制作した給食紹介や地域の魅力に触れる機会が生まれた。このような経験を通して、児童が自分たちの学びと地域社会とのつながりを実感する姿が見られた。

なお、この項目が他の項目と比べてやや低い結果となった背景には、アンケート実施時点では、制作したキーホルダーをガチャとして地域の人々に広く展開する段階までには至っていない学校もあったことが影響している可能性がある。

6. 今後の課題・展望

給食を共通テーマとした学校間交流を通して、児童が地域の特色を見つめ直し、それを表現し社会へ発信する学習の可能性が確認された。一方で、プロジェクトを継続的に発展させていくためには、いくつかの課題も明らかになった。

第一に、学校間交流を継続していくための運営体制の整備である。複数の学校が参加する形で交流を行う場合、学校間の連絡調整や活動の進行管理には一定の負担が伴う。今後は、オンライン会議やチャットなどを活用した情報共有の仕組みを整えるとともに、活動の手順や交流方法を整理し、新たに参加する学校も無理なく取り組める体制を整えていく必要がある。

第二に、学びを社会へ発信する機会の充実である。児童の作品をアクリルキーホルダーとして制作し、地域へ発信する取組を進めているが、アンケート実施時点では、ガチャとして地域の人々に広く展開する段階までには至っていない学校もあった。今後は、地域イベントや学校公開、地域施設での展示など、地域と連携した発信の機会を広げることで、児童が学びと社会とのつながりをより実感できるようにしていくことが求められる。

第三に、児童の学びの変容を継続的に捉える方法である。アンケートによって児童の意識の変化を把握することはできたが、今後は児童の振り返り記録や作品制作の過程、交流のやりとりなどを継続的に蓄積することで、学びのプロセスをより多面的に捉えることが必要である。ポートフォリオや学習記録を活用しながら、児童の思考の変化や学びの深まりを丁寧に見取る方法に

について検討していく必要がある。

また、学校間交流については、今後さらに交流の範囲を広げていくことも重要である。現在は国内7校が参加しており、年度途中から台湾の学校1校が加わり交流を行った。給食は地域の食文化や生活を反映するものであり、異なる国や地域の給食を紹介し合うことは、児童が自分たちの地域を相対的に捉え直す機会となるとともに、国際理解を深める学びにつながると考えられる。来年度は、台湾の複数の学校にも参加してもらうことを計画している。日本と台湾の児童が互いの給食や地域の食文化を紹介し合うことで、地域理解を基盤としながら視野を世界へ広げ、多様な文化や価値観を尊重する態度を育てる学びへと発展させていきたい。

今後は、これらの課題に対応しながら実践を積み重ね、参加校間で知見を共有するとともに、新たな学校の参画を促していく。給食を起点とした学校間交流を日常の教育活動として定着させ、地域理解と社会参画を結び付ける学習として発展させながら、将来的には国内外の学校が参加する持続可能な交流プロジェクトへと広げていくことを目指したい。

7. おわりに

本研究では、給食という日常の営みを起点として、地域とつながり、他者と関わりながら学びを深めていく学校間交流の可能性を探ってきた。子どもたちは交流を通して自分たちの地域を見つめ直し、学びが社会とつながっていることを実感しながら、自ら学びに向き合う姿を見せている。これからの学校教育においては、知識の習得にとどまらず、学びを社会へとひらき、子どもたちが自分の学びを社会の中で生かしていく経験を積み重ねていくことが求められる。本プロジェクトは、その具体的な在り方を示す試みである。

現在、本プロジェクトは次年度に向けて発展的な展開を計画しており、参加校同士が継続的に関わりながら学びを深めていく仕組みの整備を進めている。地域に根ざした学びを基盤とした学校間交流は、各地域の実情に応じて多様な形で展開することが可能である。本研究に関心をもつ学校には、ぜひ本プロジェクトに参加し、共に学びを創っていく仲間として加わっていただけることを願っている。

最後に、本研究の実施にあたり、交流環境の整備や実践の推進において多大なご支援をいただいた株式会社 教育ネットの皆様にご心より感謝申し上げます。また、本プロジェクトに参加し、日々の交流や実践を共に積み重ねてくださった参加校の先生方にも深く御礼申し上げます。

8. 参考文献

- ・農林水産省（各年）『食育白書』
- ・文部科学省（2021）『令和の日本型学校教育の構築を目指して（答申）』
- ・文部科学省（2022）『GIGA スクール構想の実現に向けて』
- ・OECD（2019）『OECD Learning Compass 2030』